

# ストロボを始める WorkShop

### ニッシンジャパン株式会社

本資料の一部・または全部を再配布することを禁じます

©NISSIN JAPAN LTD. 2020



# なぜ、ストロボを使うのか …

光がないと写真は撮れません。

その光を自分で作れるのが、ストロボの一番の利点です。

さあ、自分だけの光を作って、オリジナリティあふれる 写真を撮ってみましょう!



# クリップオンストロボのメリット

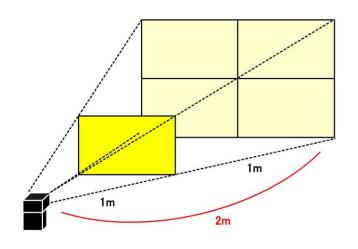
- ① 小さいのにとても明るい!
- ② 発色が良い!
- ③ オート調光なので簡単撮影!



# ① 小さいのにとても明るい! (光量が大きい)

ストロボの光量は、ガイドナンバー(GN)という単位で表します。 例えば最大GNが60のストロボは、ISO100,f4で撮影するとき、真っ暗な場所で も15m離れた被写体を適正露出で撮影できる明るさがあります。 これほどの光量を得られる写真用の小型照明機器はストロボ以外にはありません。

[もっと詳しく] ガイドナンバーは、適正露出を得るためのレンズの絞り値(F値)と被写体までの 距離(m)を掛け合わたものです[GN=絞り値(f) x 距離(m)]。したがって、最大ガイドナンバーと 絞り値が判れば、どこまで離れた被写体に適正露出で撮れるのかを算出することが出来ます。



2倍の距離にある被写体を同じ明るさで撮るには、4倍の光量が必要!

離れた被写体を撮るには、大光量が必要です。



# ② 発色が良い!

ストロボは「発色が良い」つまり「演色性が良い」。演色性(色再現性)とは、「どれだけ太陽光に近い発色が出せるか」を数値化したものです。単位はRa、基準となる太陽をRa100とし、100に近いほど自然な発色が出せ、数値が低いほど色がくすんで見えます。

### カラーチェッカーの18%グレーでWBをセット、3種類の光源下で撮影した写真の比較



通常の蛍光灯 Ra70.5



色評価用(高演色)蛍光灯 Ra98.0



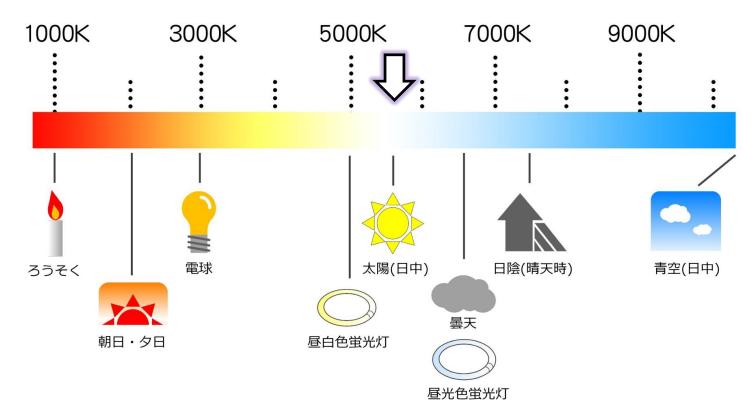
ストロボ光(Nissin i40) Ra96.5



# ② **発色が良い!** [もっと詳しく]

# 色温度

ストロボは太陽光とほぼ同じ色温度(5600K)、自然な色味を再現する光源です。色温度の単位はケルビン(K)で表します。





# ③ オート調光なので簡単撮影!

TTLとは「Through The Lens」の頭文字をとったものです。 「撮影レンズを通って」カメラ内部の調光センサーまで届いた光を使って 自動的に調光するので、TTL自動調光と呼びます。

[もっと詳しく] デジタルカメラの場合は、シャッターボタンが押された瞬間にストロボがプリ発光します。プリ発光は被写体に反射し、レンズを通して、カメラ内センサーに取り込まれます。カメラは受け取ったプリ発光の光を使って適切な光量を計算し、シャッターが完全に開いた時に、ストロボをメイン発光させる方式になっています。(これら複数回の発光を瞬時に行っている)

カメラとストロボの通信信号は、カメラメーカーごとに異なるので、 TTL自動調光を使うには各社の仕様に合わせた専用品が必要です。

キヤノン : E-TTL · E-TTL II 調光

ニコン : i-TTL ・ i-TTL BL 調光 など

ソニー : ADI · P-TTL 調光

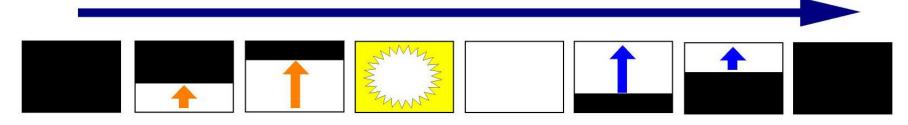


# ※ストロボ使用時に気をつけること

# ストロボ同調速度

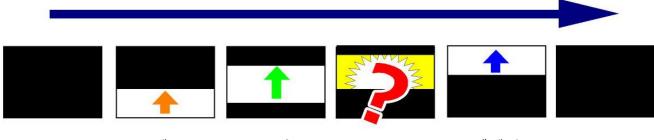
ストロボは閃光時間が短いので、シャッターが全開になった時に発光させないと画面全体に光が届きません。全開になるタイミングがある上限のシャッター速度を 「ストロボ同調速度」と言います。

低速シャッター時(ストロボ同調速度以下)



シャッターが全開になった時 ↑ にストロボは光る

### 高速シャッター時(ストロボ同調速度以上)



シャッターは開きながら閉まるため、全開になっているタイミングがどこにもないこの状態で撮影すると、画像の一部だけが暗くなる「幕切れ」が発生する





# 【実習内容】

# 午前の部:

- テキストに関する質疑応答
- ・ストロボの操作方法
- •ストロボに慣れよう
- カメラのホットシューにストロボを取り付ける「オンカメラ・ライティング」(バウンス撮影など)

# 午後の部:

・カメラからストロボを離して使う「オフカメラ・ライ ティング」(光の角度と発光面の大きさ)



# <実習のカメラ/ストロボ設定>

明るさ(光量)の調整は基本的にストロボで行いますが、カメラで調整する場合もあります。

		オンカメラ	オフカメラ
カメラ	カメラのモード	プログラムオート	マニュアルモード
	ISO	200または400	200または400
	シャッター速度	自動的に「ストロボ同調速度」以下にセット	1/125
	絞り	オート	F5.6
ストロボ	ストロボモード	TTLオート	マニュアル (手動光量切替)

[もっと詳しく] オンカメラの場合は、被写体とストロボの距離が一定ではないため、カメラはプログラムオート、ストロボはTTLにセットすると自動調整のため楽です。オフカメラの場合は、被写体とストロボの距離が固定のため、カメラもストロボもマニュアルモードにセットすると、カメラを自由に動かせるので撮影しやすくなります。



# **Nissin** バウンス撮影(オンカメラでできるライティング)

ストロボのヘッドの向きを変えて、ストロボ光を天井や壁など大きな面に 反射させ、柔らかい光でライティングを行うことができます。

### 天井バウンス→

ストロボ直射 →







# オフカメラ撮影に挑戦しよう!

# 電波式ワイヤレス ストロボシステム (ラジオスレーブ)

カメラに取り付けたコマンダーにより、 離れた場所にあるストロボの発光をコントロールします。 ストロボにはコマンダーの信号を受信するための レシーバーが必要です。



(MG10 / i60A)





レシーバー AirR



# オフカメラ撮影

ラジオスレーブなどを使い、ストロボをカメラから離して発光させます。

### 向かって左45度の場所から ストロボを直射した場合 →

ストロボをカメラの上に装着した状態で直射すると レンズの正面から光が出るため、平面的で不自然な 印象になる。

ストロボをサイドに移動しただけで陰影ができ、 より立体感に富んだ印象的な写真になる。

人間は上からの光(太陽光)でモノを見ることに 慣れているため、少し上からライティングすると より自然に見える。





# 硬い光と柔らかい光

①発光面積が小さい

②発光面積が大きい

光の柔らかさは発光 面積の大きさで変わ ります。

発光面積が小さいほど光は硬く、大きいほど柔らかいと表現されます。

硬い光は**くっきり**とした描写に、柔らかい光は**滑らかな**描写になります。

撮影のイメージに合わせて光の硬軟を調整しましょう。

